ワーズワスの『ヤロー川詩篇』について

佐々木幸子

〈目　次〉

序
I　『未訪のヤロー』(*Yarrow Unvisited*)
II　『来訪のヤロー』(*Yarrow Visited*)
III　『再訪のヤロー』(*Yarrow Revisited*)
結　び

序

ウィリアム・ワーズワス(William Wordsworth, 1770-1850)の詩にしばしば登場する川を歌った詩の中に，スコットランドのヤロー(Yarrow)川についての興味深い三篇の詩——まだ訪れたことのないヤロー川についての『未訪のヤロー』(*Yarrow Unvisited*, 1803)，その11年後実際に訪れたヤロー川を描いた『来訪のヤロー』(*Yarrow Visited*, 1814)，さらに詩人が61歳の時再びこの川を訪れた際に書かれた『再訪のヤロー』(*Yarrow Revisited*, 1831)——がある。

これらの詩篇は，同じヤロー川を題材にしていながら，創作年代がちょうど，青年，壮年，晩年にわたっていることから，ワーズワスの詩的想像力が年齢とともにどのように変化していったかを探るのに，恰好の題材である。また，ワーズワスには珍しく想像力のみによって描き出され，その後長い間詩人の心の中に秘蔵されることになったヤロー川のイメジ(『未訪のヤロー』)が，現実のヤロー川を前にしてどのような影響を受けたか(『来訪のヤロー』)，そして，晩年のワーズワスの目にかつて霊感の源となったヤロー川がどのように映ったか(『再訪のヤロー』)について考察することを通して，ワーズワスの自然観と想像力の特質を浮き彫りにしていきたいと思う。

I 『未訪のヤロー』(*Yarrow Unvisited*)

1803年の秋，33歳のワーズワスは妹ドロシイ(Dorothy)と共にスコットランド旅行に出かける。その際，多くの詩にうたわれて有名なヤロー川の近くまで行くのだが，兄妹は訪問を取り止めにするのである。その間の事情についてドロシイは，日記に次のように記している。

At Clovenford, being so near to the Yarrow, we could not but think of the possibility of going thither, but came to the conclusion of reserving the pleasure for some future time, in consequence of which, after our return, William wrote

the poem ...[(1)]

ドロシイによれば「後の楽しみ」のために残しておこうという理由だということになる.

では,『未訪のヤロー』本文の中ではどのように説明されているのだろうか?『未訪のヤロー』は,ヤロー川にぜひとも行こうというドロシイの熱心な誘いで始まっている.

"Whate'er betide, we'll turn aside,
And see the Braes of Yarrow." (st. 1)

それに対してワーズワスは,

"What's Yarrow but a river bare,
That glides the dark hills under?
There are a thousand such elsewhere
As worthy of your wonder." (st. 4)

と答え,さらにヤローをうたった詩やバラッドを通してワーズワスの心の中には長年いだいてきたヤロー川のイメジというものがあり,現実のヤロー川を訪れることによってそのイメジを損なうことは忍びないと説明する.

"Be Yarrow stream unseen, unknown!
It must, or we shall rue it:
We have a vision of our own;
Ah! why should we undo it?
The treasured dreams of times long past,
We'll keep them, winsome Marrow!
For when we're there, although 'tis fair,
'Twill be another Yarrow! (st. 7)

現実のヤローがどんなに「美しくても」,それは心の中の想像力によるヤローとは「別のヤロー」になってしまうのだというのである.ふつう我々は,風光明

媚で有名な場所を初めて訪れる時，期待に胸をふくらませながら向かうわけだが，100パーセント予想通りということはありえない。たとえそれが期待通り——あるいはそれ以上に——美しかったとしても，想像していたものとは異なっているというのが真実であろう。

しかも，ワーズワスにはかつて期待して訪れたモンブランに，大いに失望させられたという苦い経験がある。

That day we first
Beheld the summit of Mont Blanc, and grieved
To have a soulless image on the eye
Which had usurped upon a living thought
That never more could be.[(2)]

「魂のない」(soulless)現実のモンブランは，ワーズワスの心の中の空想のモンブランの「生き生きした思い」(living thought)を「侵し……もはや存在しえないもの」にしてしまったのである。つまり，ワーズワスにとって想像力によるイメジは，現実の自然の風景よりも生き生きとした存在感のあるものなのだということになる。現実の自然の風景に対する想像力によるイメジの優位性が，ここにはっきり打ち出されていると言えよう。ヤロー川に関しては，祖国の川でもあり，周辺の風景にも馴染んでいるワーズワスであるから，モンブランのように裏切られるとは予期しなかったであろうが，それでもやはり，何物にも代えがたい心の中のヤローのヴィジョン(vision)の方を大切にしたいと，ワーズワスは言うのである。

岩からたわわに下がっている美しい林檎の実を，ワーズワスは摘み取らずに「そのままにしておこう」とうたう。

Fair hangs the apple frae the rock,
But we will leave it growing. (st. 5)

この林檎は，実り豊かな想像力の創り上げたヤロー川のヴィジョンを象徴するものだと言えよう。[(3)]

それでは，ワーズワスにヤロー訪問を踏みとどまらせた想像力の生んだヤローのヴィジョンとは，どんなものだったのだろうか？

それは，この詩の冒頭に，

See the various Poems the scene of which is laid upon the banks of the Yarrow ; in particular, the exquisite Ballad of Hamilton beginning

"Busk ye, busk ye, my bonny, bonny Bride,
Busk ye, busk ye, my winsome Marrow !"

とあるように，バーンズ(Robert Burns)やハミルトン(William Hamilton, of Banqour)に代表される様々な「ボーダー・バラッド」(border ballads)や詩を通して，いつのまにか心の中で育まれてきたイメジなのである．第5節，第6節でワーズワスは次のようにうたっている．

"Oh ! green," said I, "are Yarrow's holms,
And sweet is Yarrow flowing !
Fair hangs the apple frae the rock,
But we will leave it growing.　(st. 5)

"Let beeves and home-bred kine partake
The sweets of Burn-mill meadow ;
The swan on still St. Mary's Lake
Float double, swan and shadow !　(st. 6)

想像力の生んだヤローの川辺に広がる低地は緑濃く，ヤローの流れは穏やかで美しい．まるで実際に見てきたかのように鮮やかな描写である．想像力によるヤローのイメジは，ワーズワスの心の中ですでに確固とした存在感をもつものとして完成しているのである．中でも印象的なのは，ヤロー川の水源である聖メアリー湖(St. Mary's Lake)に浮かぶ一わの白鳥であろう(st. 6)．その静かな姿は鏡のように寂とした湖面に映し出されている．静寂の中で周囲の自然と調和して完全にその一部と化している生あるものの姿である．この孤鳥は，ワーズワス唯一の恋愛詩である神秘的な『ルーシー詩篇』("Lucy Poems")の一つ『彼

女は未踏の地に住んでいた』(“She dwelt among the untrodden ways”, 1799)において，ルーシーがたとえられている「苔むした石に半ば隠され」ひっそり咲く「一輪の菫」や「夜空にただ一つ輝く星」につながるものであろう。

A violet by a mossy stone
  Half hidden from the eye!
—Fair as a star, when only one
  Is shining in the sky. (st. 2)

どちらも，自然の静寂の中で周囲と調和しながら存在する孤独なものの生み出すひっそりとした美しさである。これこそワーズワスの捉えた自然の究極的な美なのであろう。

ワーズワスは何らかの体験を詩に書くためペンを取るまでに，数年から十数年の時間を要するという特異性をもつ詩人である。それは，もとになった体験(原体験)が時を経て体験当時の生々しい強烈さを失った後，「静寂のうちに回想された」(recollected in tranquillity)時，初めて詩作にふさわしいイメジとして完成するのだというワーズワス独特の詩作のパターンによるものである。

...poety is the spontaneous overflow of powerful feelings: it takes its origin from emotion recollected in tranquillity ...[(4)]

こうした独特の詩作形態によるためか，ワーズワス詩に描かれた内容は，しばしば原体験と食い違いをみせることがある。原体験から執筆時までの間に「想像力による色どり」(a certain colouring of imagination)[(5)]が施されているからなのであろう。『未訪のヤロー』の場合は，かつて読んだ「ボーダー・バラッド」が原体験の役割を果たしているものと思われるが，こうして生まれ，完成しているヴィジョンについて異論を唱えられることを，ワーズワスは極端に嫌っている。これらのヴィジョンが，長年の間心の中で少しずつ想像力によって育まれながら，確固とした存在感をもつに至ったものであることを考えると，当然のこととも言えるが，たとえば，ワーズワスがしばしば詩作の時に拠り所としていたというドロシーの日記に記されている詳細な事実関係についてさえも，

時としてワーズワス自身の心の中の回想のヴィジョンと異なっている場合，たいへん疎ましく思ったという記録さえある[(6)]．ワーズワスがヤロー訪問を渋ったのも同じ理由によるものであろう．現実の自然に対する想像力の描いた自然のヴィジョンの優先である．

ワーズワスがもう一つの理由としてあげているのは，まだ見ぬヤローという美しい秘境が存在するのだという事実が，将来労苦が訪れた時，慰めになってくれるだろうというものである．

'Twill soothe us in our sorrow,
That earth has something yet to show,
The bonny holms of Yarrow!" (st. 8)

ここには，『未訪のヤロー』執筆の一年前(1802年)に親友コールリッジ(Samuel Taylor Coleridge)の苦境に触発されて表面に出てきた幻視力(visionary power)喪失の危機感が響いているものと思われる．

Whither is fled the visionary gleam?
Where is it now, the glory and the dream?[(7)]

もともとワーズワスは，未知の世界へ誘ってくれる「幻視体験」(visionary experiences)は，自然の側からの働きかけと自分の側からのそれとの両者の協力関係によって生み出されるものと考えていた．

An auxiliar light
Came from my mind, which on the setting sun
Bestowed new splendour . . .[(8)]

幻視力の喪失は，とりもなおさず生気に満ちた自然を前にしてその働きかけに応じる自らの「補助的な光」(An auxiliar light)が失われてしまうことであり，結果として永遠の世界を垣間見せてくれる幻視体験がもはや訪れないということにつながる．幻視体験の記憶を詩の源泉としてきたワーズワスにとっては，重大な危機なのである．

My heart leaps up when I behold
　　A rainbow in the sky:
So was it when my life began;
So is it now I am a man;
So be it when I shall grow old,
　　Or let me die![9]

子供のころ虹を見て心が踊ったように，今後も自然の美に感動する心を持ち続けたい。もしそれが失われてしまうのなら死んだ方がよいと断言するワーズワスにとって，幾多の詩人に感銘を与え，名詩を生んだヤロー川の存在は，自然の美に感動する心を失いつつあるワーズワスにも，必ず感動を与え，幻視力の輝きを取り戻してくれるはずの希望の星に見えたのであろう。

一見矛盾するように思われる二つの理由であるが，ワーズワスにとっては切実な内面の葛藤が生んだものなのである。そして，この緊張感が『未訪のヤロー』に緊迫した静寂の美を添えているのである。

II 『来訪のヤロー』(*Yarrow Visited*)

1814年9月，44歳のワーズワスは妻メアリー(Mary)と義妹セアラ・ハッチンソン(Sara Hutchinson)を伴って，再びスコットランドを訪れる。この際，詩人ジェームズ・ホッグ(James Hogg)を訪ねるが，この「エトリックの森[10]の羊飼い」(the Ettrick Shepherd)と呼ばれたスコットランドの詩人は，ワーズワスらをついにヤロー川へと案内したのである。そして，『未訪のヤロー』執筆後11年を経て，『来訪のヤロー』が書かれることになる。

歳月が流れたとはいえ，あれほど強く現実のヤローを訪れまいと心に誓ったワーズワスに，ヤロー訪問を決意させたものは何だったのだろうか。いくらホッグの誘いに対して礼を失しないためとはいえ，詩人としての使命感をもち，信念の人であったワーズワスが，ただそれだけの理由で日頃の信念を曲げてヤロー訪問に応じたとは考えられない。ここには，ワーズワス自身の心境の変化

が色濃く影を落としているはずである．

『未訪のヤロー』執筆からの11年間に，ワーズワスにはいくつかの苦難が訪れている．『未訪のヤロー』執筆当時(1803年)，すでに著現化していた幻視力喪失の危機は，この時までにはすでに現実のものとして明白化していたと思われるし[11]，また，弟ジョン(John Wordsworth)の死や妻メアリーとの間に生まれた二人の子供の死という人間的苦悩(human sufferings)も経験しているのである．特に今回の旅行は，二人の子供の死後，そのショックからなかなか立ち直れない妻メアリーの健康回復のためのものであった[12]．様々な意味で，ワーズワスが「無常」を痛切に感じていた時期にあたると言えよう．この旅行を機にワーズワスは，時と共に失われていくものの中にあって常に変わることのない生きる拠り所としての自然を，再確認したかったのではないかと思われるのである．ヤロー訪問についても，ホッグのタイミングのよい申し出を待つまでもなく，ワーズワス自身心の中ですでに決意していたことなのであろう．つまり，『未訪のヤロー』の結びでワーズワスが，

"If Care with freezing years should come...
'Twill soothe us in our sorrow,
That earth has something yet to show,
The bonny holms of Yarrow!"　(st. 8)

と語った自然に対する信頼の念と自然の傷ついた心を癒やす力の再確認のための訪問なのである．そして，結果はワーズワスの期待通りのものであった．『未訪のヤロー』は次のように結ばれている．

The vapours linger round the Heights,
They melt, and soon must vanish;
One hour is theirs, nor more is mine—
Sad thought, which I would banish,
But that I know, where'er I go,
Thy genuine image, Yarrow!
Will dwell with me—to heighten joy,

And cheer my mind in sorrow. (st. 11)

様々な消えていく，失われていくものの中で，人間の命もほんの束の間のものでしかない(nor more is mine)。そうしたものの中で，今日目にしたヤロー川の美しいイメジは，いつまでも消えることなくワーズワスの心の中に生き続け，心の支えとなってくれるというのである。

では，自然はどのような形でワーズワスの期待に応えてくれたのだろうか？ワーズワスには，以前ヤロー訪問を踏みとどまった二つの大きな理由があった。想像力にまつわるそれらの理由は，現実のヤロー訪問とは相容れることがないものであったはずである。そこで，現実のヤローを前にしてそれらがどのような影響を受けたかを，考察しておきたいと思う。

第一の理由は，現実のヤローを訪れることによって想像力のヤローを損いたくないというものであった。これについては，『来訪のヤロー』冒頭に，現実のヤロー川を前にして心の中の想像力のヤローの「イメジ」が否定され，「滅びてしまった」(An image that hath perished!) として登場する。

AND is this—Yarrow?—*This* the Stream
Of which my fancy cherished,
So faithfully, a waking dream?
An image that hath perished! (st. 1)

ワーズワス自身当然予想していたことだったであろうが，そこには，いかんともしがたい「悲しみ」(sadness)が残る。

O that some Minstrel's harp were near,
To utter notes of gladness,
And chase this silence from the air,
That fills my heart with sadness! (st. 1)

「だが何故(悲しむのだろう)？」とワーズワスは自問する。眼前に広がるヤローの川辺はこの上ない美しさをたたえているというのに。

Yet why?—a silvery current flows

With uncontrolled meanderings ; (st. 2)

ここでワーズワスは，現実のヤローと想像力のヤローとの比較を試みる．『未訪のヤロー』で「ヤローの川辺は緑濃い」(Oh ! *green*...are Yarrow's holms) (st. 5.イタリックは筆者) とうたったワーズワスは，『来訪のヤロー』では「今までに……これほど緑濃い丘によって心を慰められたことはない」と断言し，

Nor have these eyes by *greener* hills
Been soothed, in all my wanderings. (st. 2.イタリックは筆者)

さらに，ワーズワスの想像力が生んだ最も美しいイメジの一つである湖面に純白の姿を映しながら浮かぶ一わの白鳥を想像した聖メアリー湖の現実の姿についても，ワーズワスは，期待に違わず鏡のような湖面(mirror)に山々の姿を鮮やかに映し出しながら，「歓びに満ちている」(delighted) とうたっている．

And, through her depths, Saint Mary's Lake
Is visibly delighted ;
For not a feature of those hills
Is in the mirror slighted. (st. 2)

現実のヤローは，想像力のヤローに少しも劣らず美しいものなのである．それは，想像力のヤローを失った悲しみに触発されて，ことさら鮮やかにワーズワスの目に映っているように思われる．

But thou, that didst appear so fair
To fond imagination,
Dost rival in the light of day
Her delicate creation : (st. 6)

ヤロー訪問を取り止めにした第二の理由は，将来必ずワーズワスの幻視力を刺激してくれるはずのものとして，現実のヤロー訪問を後の楽しみのために残しておこうというものであった．これについてワーズワスは，『来訪のヤロー』の結びに近い第 10 節で，ヤロー川に沿って下りながら目にしたヤローの美しく豊かな風景によって，若かりしころほどではないにせよ，期待通りワーズワス

の想像力は確かに刺激され(A ray of fancy still survives)，ワーズワスの詩的霊感の泉も甦ってくると語っている。

A ray of fancy still survives—
Her sunshine plays upon thee!
Thy ever-youthful waters keep
A course of lively pleasure;
And gladsome notes my lips can breath,
Accordant to the measure. (st. 10)

現実のヤローを見てしまった以上，「将来の楽しみ」は存在しなくなってしまった。しかしながら，ワーズワスが目にした現実のヤローは，ワーズワス自身の想像力の助けをかりて，「心の眼」(inward eye)[13]に鮮烈な印象を残すヴィジョンを創り上げたのである。ヴィジョン創造という自然とワーズワスとの共同作業が，ここに完成したと言えよう。従って，ワーズワスは想像力のヤローを失って，現実のヤローを「勝ちとった」(won)と断言する。

I see—but not by sight alone,
Loved Yarrow, have I won thee; (st. 10)

『序曲』(*The Prelude, or Growth of a Poet's Mind*)の中でワーズワスは，自らの過去の人生を振り返った時，時の流れと共に失われ，忘れ去られていくものの中で，その過去の眺望(prospect)の中から，それに逆らうがごとくきらめきながら甦ってくる瞬間があると語り，このような「心の眼」に映じる輝かしいヴィジョンの瞬間を「時点」(spots of time)と呼んでいる。

There are in our existence *spots of time*,
Which with distinct pre-eminence retain
A vivifying virture, whence, depressed
By false opinion and contentious thought,
Or aught of heavier or more deadly weight,
In trivial occupations, and the round

Of ordinary intercourse, our minds
Are nourished and invisibly repaired;
Such moments...
Are scattered everywhere, taking their date
From our first childhood: in our childhood even
Perhaps are most conspicuous. Life with me,
As far as memory can look back, is full
Of this beneficent influence.[14]　（イタリックは筆者）

幼いころに最も頻繁であったというこれらの「時点」の中に，今回のヤローのイメジが加えられたことは言うまでもない．そして，あの「黄水仙」(daffodils)が「空虚な，あるいは思いに沈んだ気分の時……心の眼に」輝き出て慰め，元気づけてくれたように，

For oft, when on my couch I lie
In vacant or in pensive mood,
They flash upon that inward eye
Which is the bliss of solitude;
And then my heart with pleasure fills,
And dances with the daffodils.[15]

このヤローのイメジも，常にワーズワスと共にあり，悲しい時に励まし，喜びを与えてくれるのである．

...I know, where'er I go,
Thy genuine image, Yarrow!
Will dwell with me—to heighten joy,
And cheer my mind in sorrow.　(st. 11)

さて，ここで現実のヤローがワーズワスの想像力を刺激して生まれたヴィジョンについて，一考しておきたいと思う．

『未訪のヤロー』における自然描写でまず目にとまるのは，先に引用した聖メアリー湖の様子を描いた一節にみられるように，自然の繊細な美しさを絵画的に描き出した表現である。

a *silvery current* flows
With uncontrolled meanderings ; (st. 2.イタリックは筆者)

A blue sky bends o'er Yarrow vale,
Save where that *pearly whiteness*
Is round the rising sun diffused,
A tender hazy *brightness* ; (st. 3.イタリックは筆者)

そして，「空想の一筋の光が依然として生き残っている」(st. 10)という言葉どおり，ヤローの風景を描写するワーズワスの表現には，「輝き」が溢れているのである(上記引用中のイタリック部分参照)。かつての「幻視の輝き」(visionary gleam)が，ここでもワーズワスの内側から輝き出して周囲の風景を満たしたのだと言えよう。

しかしながら，ここには——

...in such strength
Of usurpation, in such visitings
Of awful promise, when the light of sense
Goes out in flashes that have shown to us
The invisible world ...[16]

...the breath of this corporeal frame
And even the motion of our human blood
Almost suspended, we are laid asleep
In body, and become a living soul :
While with an eye made quiet by the power
Of harmony, and the deep power of joy,

We see into the life of things.[17]

——といった「自然の美しい形象」(the beauteous forms/Of Nature[18])を前にして恍惚となり，未知の世界を垣間見るに至った，若かりしころの強烈な茫然自失の陶酔をもたらす自然との共感はみられない．そのかわり読む者の心を動かすのは，チャールズ・ラム(Charles Lamb)も絶賛している第6節の，実りの秋の豊かさの中でこれから冬を迎えようとしている森に漂うそこはかとないメランコリーや，

Meek loveliness is round thee spread,
A softness still and holy ;
The grace of forest charms decayed,
And pastoral melancholy.　(st. 6)

第8節にみられる自然の包容力，守ってくれる存在としての自然のあたたかさが伝わってくるような表現なのである．

Fair scenes for childhood's opening bloom,
For sportive youth to stray in ;
For manhood to enjoy his strength ;
And age to wear away in !
Yon cottage seems a bower of bliss,
A covert for protection
Of tender thoughts, that nestle there—
The brood of chaste affection.　(st. 8)

無常を痛感するワーズワスの人間性に対する洞察の深まりが，自然を見つめる目にも反映しているのだと言えるだろう．

そして，ヤローの景観に加えてワーズワスの想像力を刺激するものとして『来訪のヤロー』に登場しているのは，昔から「ボーダー・バラッド」(border ballads)に歌われてきたスコットランドの氏族(clan)間の，そしてスコットランドとイ

ングランドの間の抗争の血なまぐさい歴史や，束の間の平和な時代にヤローの谷間につどった恋人たちの姿である。[19]「ボーダー・バラッド」については，『未訪のヤロー』でも想像力のヤローを生むもとになったものとして言及されていたが，主としてヤローの景観についてのもので，そこにうたわれた人間的な営みについては殆ど触れられてはいなかった。ここにも，ワーズワスの心が自然中心から人間の営みへと向かうようになった形跡が窺われる。そして，それと対になる形で描かれているのが，現在の豊かな実りの秋を迎えたヤローの谷間の穏やかで美しい姿である。

Where was it that the famous Flower
Of Yarrow Vale lay bleeding?
His bed perchance was yon smooth mound
On which the herd is feeding:
And haply from this crystal pool,
Now peaceful as the morning,
The Water-wraith ascended thrice—
And gave his doleful warning. (st. 4)

Delicious is the Lay that sings
The haunts of happy Lovers,
The path that leads them to the grove,
The leafy grove that covers:
And Pity sanctifies the Verse.
That paints, by strength of sorrow,
The unconquerable strength of love;
Bear witness, rueful Yarrow! (st. 5)

That region left, the vale unfolds
Rich groves of lofty stature,
With Yarrow winding through the pomp
Of cultivated nature;

And, rising from those lofty groves,
Behold a Ruin hoary!
The shattered front of Newark's Towers,
Renowned in Border story. (st. 7)

Fair scenes for childhood's opening bloom,
For sportive youth to stray in;
For manhood to enjoy his strength;
And age to wear away in!
Yon cottage seems a bower of bliss,
A covert for protection
Of tender thoughts, that nestle there—
The brood of chaste affection. (st. 8)

自然の「ヒーリング・パワー」("healing power"癒やす力[20])が強調されていることは言うまでもない.

『未訪のヤロー』執筆のころのワーズワスの想像力は，湖上に浮かぶ一わの白鳥に象徴されるような，静かだが鮮やかな印象を残す孤独の自然のヴィジョンを生んだ．それに対して，『来訪のヤロー』のそれは，静澄さや鮮烈さでは劣るが，自然の繊細な美しさや豊かさ，そして憂鬱を捉え，人間的営みに対する深い洞察を示している．そして，ヒーリング・パワーをもつ穏やかなヴィジョンを描き出しているのである．強烈さは失ったが，そのかわり年齢を重ねたことによる人間性への理解の深まりが，想像力にも反映し，「心の眼」に描き出すヴィジョンにもしみじみとした色合いを添えているのだと言えよう．

III 『再訪のヤロー』(*Yarrow Revisited*)

『来訪のヤロー』執筆からさらに 17 年後の 1831 年，61 歳のワーズワスは愛娘ドーラ(Dora)と共に，病気静養のためナポリへ旅立つ予定の長年の友サー・

ウォルター・スコット(Sir Walter Scott, 1771-1831)[21]をアボッツフォード(Abbotsford)に訪ねる。その時，スコットの案内でワーズワスは再びヤロー川を訪れ，『再訪のヤロー』が書かれることになる。[22]

『来訪のヤロー』(1814年)以降，ワーズワスにはいわゆる「転向」が訪れている。幻視力の喪失によって，それまで生きる拠り所としてきた自然を，めくるめく幻視体験をもたらして導いてくれる存在として全面的に信頼できなくなったためであろうか，ワーズワスはキリスト教的な信仰へと傾倒していくのである。[23] 1821年には『キリスト教ソネット集』(*Ecclesiastical Sonnets*)の大半を書き上げており，『再訪のヤロー』執筆の頃(1831年)までには，すっかりキリスト教的な信仰の生活を送るようになっていたものと思われる。

しかしながら，ワーズワスは全く自然から目をそらしてしまったわけではない。かつての自然との霊的な交わりの思い出は，ワーズワスの心の中に「もえさし」(embers)[24]ながらもこの上ない喜びの記憶として残り，そのような素晴らしい体験をもたらしてくれた自然に対する愛情や感謝の念は，キリスト教信仰と共存，調和する形でますます深まっていったのである。

そんな折，かつて苦境にあった時にこの上なく美しい姿を見せてヴィジョンの輝きを取り戻させてくれたヤロー川と，ワーズワスは再会する。時が流れても変わることなく美しい姿をみせるヤローの流れは，今回もワーズワスをあたたかく迎えてくれるのである。

Grave thoughts ruled wide on that sweet day,
  Thier dignity installing
In gentle bosoms, while sere leaves
  Were on the bough, or falling;
But breezes played, and sunshine gleamed—
  The forest to embolden;
Reddened the fiery hues, and shot
  Transparence through the golden. (st. 2)

For busy thoughts the Stream flowed on

In foamy agitation;
And slept in many a crystal pool
For quiet contemplation:
No public and no private care
The freeborn mind enthralling,
We made a day of happy hours,
Our happy days recalling. (st. 3)

「いつも変わらぬ顔」(st. 5)を見せてくれるヤロー川を前にしていると，ワーズワスには「過去，現在，未来」という時の流れさえも，「すべてが調和のうちに結合するかのように思われ」てくる．

Past, present, future, all appeared
In harmony united, (st. 4)

そして，今はもうかつてのように鮮やかに甦ることがなくなってしまったワーズワスの心の中の過去の「眺望」(prospect)の中に散らばる「時点」も，その輝きを回復するかのように感じられるのである．

And if, as Yarrow...
Did meet us with unaltered face,
Though we were changed and changing;
If, *then*, some natural shadows spread
Our inward prospect over,
The soul's deep valley was not slow
Its brightness to recover. (st. 5)

だが，『再訪のヤロー』にはそれ以上ヤローのヴィジョンについての描写はない．悲しいことにワーズワスには，かつてのように輝かしいヴィジョンが甦ることは現実にはなかったのであろう．それほど心の「眺望」の上に広がった「影」(some natural shadows)は，振り払うことができないほど重く厚いものだったのである．——幻視力の光を覆い隠す「影」には“natural”(生あるものに当然訪れ

るべき)という形容詞が付されている。ワーズワスが，幻視力喪失を人間としての一種の宿命として受け入れていることが窺われる。

そして，『再訪のヤロー』の後半部分に続くのは「詩神」(Muse)に対する賞賛の言葉(st. 6)と，これから病気静養のため故郷のスコットランドを後にしなければならない詩人スコットの偉業をたたえ，励ましの言葉をおくる表現である。

Eternal blessings on the Muse,
  And her divine employment!
The blameless Muse, who trains her Sons
  For hope and calm enjoyment;
Albeit sickness, lingering yet,
  Has o'er their pillow brooded;
And Care waylays their steps—a Sprite
  Not easily eluded. (st. 6)

For thee, O SCOTT!...
  May classic Fancy...
  Preserve thy heart from sinking! (st. 7)

For Thou, upon a hundred streams,
  By tales of love and sorrow,
Of faithful love, undaunted truth,
  Hast shed the power of Yarrow;
And streams unknown, hills yet unseen,
  Wherever they invite Thee,
At parent Nature's grateful call,
  With gladness must requite Thee. (st. 9)

『再訪のヤロー』が書かれた1831年当時，ワーズワスは目の病に苦しみ，61歳という年齢からくる体力的な衰えを痛感していた時期であった。その二年前，妹ドロシイが突然の発作に倒れてから以前のように戸外を歩きまわることができなくなってしまった事情もあり，いつまで執筆活動を続けられるかという不

安を，ワーズワス自身強く感じていたものと思われる．ちょうどそんな折，数年前と比べてみる影もなく衰えてしまったスコットとワーズワスは再会したのである．大変なショックを受けたことは容易に想像できよう．

> I was then scarcely able to lift up my eyes to the light. How sadly changed did I find him from the man I had seen so healthy, gay, and hopeful a few years before, when he said at the inn at Paterdale, in my presence, his daughter Anne also being there, with Mr. Lockhart, my own wife and daughter, and Mr. Quillinan, 'I mean to live till I am eighty, and shall write as long as I live.' Though we had none of us the least thought of the cloud of misfortune which was then going to break upon his head, I was startled, and almost shocked, at that bold saying, which could scarcely be uttered by such a man, sanguine as he was, without a momentary forgetfulness of the instability of human life.[25]

すっかり体力の衰えたスコットを前にして，ワーズワスは自らの詩人としての残りの人生に思いを馳せ，スコットの運命を自分のことのように感じていたのである．そこで，ワーズワスの口をついて出たのは，詩神をたたえる言葉と詩人スコットへの励ましの言葉である．それが自らの詩人としての残りの人生に対する励ましでもあったことは，言うまでもない．

このような状況のもとで書かれた『再訪のヤロー』は，自然との神秘的な交わりよりも，詩神礼賛やスコットへの励ましに力点が置かれることとなり，その結果，「感傷的で人間味が濃い[26]」ものとなっている．『来訪のヤロー』においては，人間性に対する洞察の深まりが自然を見つめるワーズワスの目に「よりくすんだ色どり」(a sober colouring[27])を与え，人の心を和ませるヒーリング・パワーを持つヤローのヴィジョンを生んでいた．つまり，自然と人間に対する関心が程よい調和を保って，落着いた趣きある表現を生んでいたのである．それに対して，『再訪のヤロー』では力点がすっかり人間的なものに移ってしまっているため，個人的で哀愁的な印象を与える結果となっている．

結　び

三篇の『ヤロー川詩篇』を評して，バーナード・グルーム(Bernard Groom)は，

The threee Yarrow poems together form a thread which unites a whole imaginative life.[28]

と語っているが，想像力第一主義の若々しい『未訪のヤロー』，現実の自然に対する愛情と人間の営みに対する理解の深まりが，程よい調和を保って穏やかな趣きを加えた『来訪のヤロー』，そして，人間的なものに重点が置かれた哀愁的な『再訪のヤロー』は，それぞれ，青年期，壮年期，老年期におけるワーズワスを非常によく描き出している。季節で言えば，ちょうど春，夏，秋の雰囲気をもつ詩篇だと言えよう。そしてこれらの詩は，その時々のワーズワスの自然観，想像力のあり方，そして詩人としての人生そのものを示す試金石となっているのである。

ワーズワスが生まれ育ち，人生の大半を過ごしたイングランド北西部の湖水地方(the Lake District)は，清らかな水に恵まれた土地であった。そのため，ワーズワスが愛した自然の形象の中でも，「川」は筆頭にあげられるものの一つとなっている。

そして，ワーズワス詩の随所に登場して時には人生を，時には時の流れの速さを，そして時には詩人の想像力の働きを示す代表的なイメジャリー(imagery)となっているのが，この「川」なのである。ワーズワスがヤロー川に対して特別の感慨を懐いたのも，「川」に対するこうした特別の思いがあったからこそだと言えるかもしれない。

三篇の『ヤロー川詩篇』は，それぞれワーズワスにとって危機的な時期に書かれている。そして，そのどの時期においてもヤロー川は，ワーズワスの期待に充分こたえてくれたのである。

Flow on for ever, Yarrow Stream!

To dream-light dear while yet unseen,
　Dear to the common sunshine,
And dearer still, as now I feel,
　To memory's shadowy moonshine!　　(*Yarrow Revisited*, st. 14)

まだ訪れたことがない時にも「夢の光にとって愛しく」(To dream-light dear)(『未訪のヤロー』)，実際に訪れた時には「ふつうの(＝現実の)日光に対して愛しく」(Dear to common sunshine)(『来訪のヤロー』)，そして，今はもう鮮やかに甦ることのない「記憶の影に覆われた月光に対して，尚も愛しい」(dearer still.../To memory's shadowy moonshine!)(『再訪のヤロー』) ヤロー川は，詩人がその八十年にわたる人生で二度しか訪れる機会に恵まれなかったにもかかわらず，ワーズワスにとって，常に変わることのない豊かで緑濃い，清らかな心のオアシスであり続けたのである．

Texts

The Poetical Works of William Wordsworth (Oxford University Press, ed. Ernest de Selincourt & Helen Darbishire, 1940-9 ; 2nd ed., 1952-4, 5 vols.)

The Prelude, or Growth of a Poet's Mind (Oxford Univ. Press, ed. E. de Selincourt, 1926, rev. ed. H. Darbishire,1959)

＊Oxford 版の『序曲』には 1805-6 年版と 1850 年版の text があるが，本論の引用はすべて 1805-6 年版によっている。

The Prose Works of William Wordsworth (Edward Moxon, Son, and Co., ed. Rev. Alexander B. Grosart, 1876, AMS Press, Inc., 1976, 3 vols.)

Notes

(1) Dorothy Wordsworth's *Recollections* for Sep. 18, 1803 (*The Poetical Works of W. W.*, vol. iii, p. 446)

(2) Wordsworth, *The Prelude*, Bk. VI, 11. 452-6.

(3) この岩からたわわに下がるりんごのイメジは，W.ハミルトンの『ヤローの土堤』(*Braes of Yarrow*)によるものだという。(Cf. *The Poetical Works of W. W.*, vol. iii, p. 84, fn.)ヤローのヴィジョンがボーダー・バラッドがもとになって心の中に生まれたものであることを考えると，『ヤローの土堤』によって生まれたヴィジョンを大切にしようという含みが加わることになる。二重の象徴となっているように思われ，興味深い。

(4) Wordsworth, "Preface" to the Second Edition of *Lyrical Ballads*, par. 26. (*The Poetical Works of W. W.*, vol. ii, p. 400) *text は 1845 年の final form による。

(5) *Ibid.*, par. 5 (*Ibid.*, p. 386)

(6) Cf. Dorothy Wordsworth's *Journals* for Mar. 13 &14 (*The Poetical Works of W. W.*, vol. ii, p. 508)

(7) Wordsworth, *Ode : Intimations of Immortality from Recollections of Early Childhood* (1802-1804), sec. iv. *secs. i～iv は 1802 年の 3 月から 6 月にかけて書かれている。

(8) Wordsworth, *The Prelude*, Bk. ii, 11. 387-9.

(9) Wordsworth, "My heart leaps up" (1802), 11. 1-6.

(10) ヤロー川はエトリックの森の中をうねって流れている。

(11) 『来訪のヤロー』執筆は 1814 年であるからワーズワスが多くの傑作を書き上げた「偉大な十年」(the great decade)——1798 年～1807 年(1797 年～1806 年とす

る説もある)——はすでに過ぎ去っている.

(12) Cf. Mary Moorman, *William Wordsworth: A Biography——The Later Years 1803-1850*, p. 259.

(13) Wordsworth, "I wandered lonely as a cloud" (1804), st. 4.

(14) Wordsworth, *The Prelude*, Bk. xi, 11. 258-79.

(15) Wordsworth, "I wandered lonely", st. 4.

(16) Wordsworth, *The Prelude*, Bk. vi, 11. 531-6.

(17) Wordsworth, *Lines Composed a Few Miles above Tintern Abbey on Revisiting the Banks of the Wye during a Tour, July 13*, 11. 43-49.

(18) Wordsworth, *The Prelude*, Bk. ii, 11. 51-2.

(19) Cf. Michael Brander, *Scottish and Border Battles and Ballads* (Seeley Service & Co. Ltd., 1975).バラッド全般については James Reed, *The Border Ballads* (The Athlono Press, Univ. of London, 1975)がある.

(20) Matthew Arnold, *Memorial Verses*, 1. 63 (*The Works of Matthew Arnold*, Macmillan, 1903, vol. i *Poems*, p. 252)

(21) スコットとワーズワスの親交は,1803年にスコットランド旅行中のワーズワスが,妹ドロシイと共に,ラスウェイド(Lasswade)のスコットの家を訪ねた時から始まっている.この時スコットはワーズワス兄妹に,執筆中の『最後の吟遊詩人の歌』(*The Lay of the Last Minstrel*)——ヤロー川が流れるスコットランド辺境(border)地方が舞台になっている(1805年発表)——の一部を朗誦して聞かせたという. Cf. *The Prose Works of W. W.*, vol. iii, p. 138.

(22) 『再訪のヤロー』は『再訪のヤローとその他の詩集』(*Yarrow Revisited, and Other Poems*)として1835年に出版されている.

(23) ワーズワスの「転向」の理由については諸説があるが,筆者は幻視力喪失によって自然宗教が維持できなくなったことが第一の原因ではないかと考えている.

(24) Wordsworth, *Ode: Intimations of Immortality*, sec. ix.

(25) *The Prose Works of W. W.*, vol. iii, pp. 138-139.

(26) 添田透『ワーズワス点描』(大阪教育図書, 1977), p. 92.

(27) Wordsworth, *Ode: Intimations of Immortality*, sec. xi.

(28) Bernard Groom, *The Unity of Wordsworth's Poetry* (Macmillan, 1966), p. 174.